

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

初級韓国人学習者の特殊拍の習得研究

—動詞のテ形に着目して—

沈 希津

2019年 3月

修士論文概要書

本研究は、韓国人学習者のテ形習得過程における特殊拍の習得プロセスを明らかにするための基礎研究である。本研究では初級の韓国人学習者に着目し、動詞のテ形習得における特殊拍の使用実態および習得プロセスを明らかにした。その上で、韓国人学習者に対するテ形の指導について提言した。以下、本論文の流れに沿って、概要を記述する。

第1章 序論

第1章では、筆者の問題意識と研究動機について述べた後、研究目的と研究課題（以下、RQ）を提示した。その後、本論文の構成と用語の定義を記した。

韓国語を母語とする日本語学習者（以下、韓国人学習者）の日本語の習得における共通の困難な点として、特殊拍の習得がよく挙げられている。筆者の日本語学習経験においても特殊拍の発音ができているかどうか不安を抱いていた。筆者が日本語を学んでいた韓国における日本語教育で、ある文法項目についての学習者の習熟度を測る際には、「正しく発音できるか」よりは「正しく書けるか」によって評価されていた。発音で特殊拍の誤用が見られても、音韻レベルの音声教育は行われていなかったため、「正しく覚えているからといって、発音も正しくできるといえるのか」という問題意識を持つようになった。

動詞のテ形には、音便により促音、撥音、長音が現れるため、そうした観点から学習者が特殊拍をどのように発音するかが総合的に検討できるという特徴がある。また、テ形はコミュニケーションにおいて頻繁に使われる文法項目でもある。このような特徴により、本研究で韓国人学習者のテ形習得における特殊拍の習得プロセスを明らかにすることに至った。また、本研究では韓国人日本語学習者のテ形習得過程を明らかにする最初の段階として、初級の韓国人学習者に着目した。問題意識と研究動機に基づき、以下の研究目的とRQを設定した。

研究目的：初級の韓国人学習者のテ形習得過程において、テ形の発音の習得に影響する要因を探り、特殊拍についてどのような発音指導が必要であることを明らかにする。

RQ1：初級の韓国人学習者のテ形習得過程において、日本語学習歴はテ形の発音の習得にどのように影響するか。

RQ2：初級の韓国人学習者のテ形習得過程において、習得状況はテ形の発音の習得にどのように影響するか。

RQ3：初級の韓国人学習者のテ形習得過程において、特殊拍の習得の難易度はどのように現れるか。

第2章 先行研究

第2章では、本研究のテーマを細分化し、それぞれの領域と関連する先行研究の成果と指摘をまとめた。まず、第二言語習得における特殊拍の習得についての先行研究を紹介し、中間言語としての学習者音声に着目する意義について述べた。

次に、動詞のテ形習得における特殊拍の習得に注目する必要性について、先行研究で指摘されている点を提示した。その後、韓国人学習者の特殊拍の習得に関する先行研究を挙げた。先行研究により、日本語と韓国語のリズムは異なっていることが明らかになっていた。また、関（2007）では、韓国人学習者が「日本語の語中の清音を韓国語の濃音で代用する」（p. 58）傾向があることを指摘している（詳細は本文を参照）。このような代用の結果、促音のないところに促音が挿入されてしまうことを指摘している。最後に、本研究の調査方法と関連し、発音とともに文字表記の生成データに着目した研究について述べた。先行研究では音声の認識状況が明瞭に現れるという特徴から、文字表記の生成データに着目する必要性があると主張されている。また、先行研究の少なさが指摘され、さらなる研究が行われる必要であるという課題が挙げられている。筆者は、文字表記のデータに音声の認識状況だけではなく、文法の習得状況も明瞭に現れる特徴があると考え、学習者の発音とともに文字表記の生成データに着目した。

以上の先行研究を概観した結果、本研究を行う必要性が明らかになった。動詞のテ形には、1) 音便により特殊拍が現れる、2) 撥音便とイ音便の一部の場合を除き、音便の後に清音が続く（「-て」）という2つの特徴がある。しかし、動詞のテ形における特殊拍に着目した研究については、まだ研究の余地が多く残されている。その上で、学習者の発音とともに文字表記の生成データに着目した研究は数少ない。そのため、韓国人学習者が動詞のテ形に現れる特殊拍をどのように発音していて、特殊拍の習得プロセスはどのように現れるかを調べ、テ形習得における特殊拍の使用実態を把握する必要があることを主張した。

第3章 調査方法とデータ

第3章では、本研究の調査方法について述べた。まず、調査協力者の初級の韓国人学習者20名を対象に、フェイスシートを記入してもらい、初級の韓国人学習者の日本語学習歴（日本語学習を始めて何ヶ月が経ったか）と1週間の学習時間（1週間の間、授業や独学で日本語を何時間勉強しているか）について回答してもらった。

次に、発音と文法の側面から動詞のテ形活用における2つの生成調査を行った。調査Ⅰでは初級の韓国人学習者が動詞のテ形をどのように発音するかについて調べ、正しく生成できた1語につき1点で得点化した。調査Ⅱでは初級の韓国人学習者は動詞のテ形を正しく覚えているか、動詞の辞書的な意味を知っているかについて調べた。

RQの分析方法について述べた。RQ1の解明のため、日本語学習歴と1週間の学習時間によって調査協力者をグループ化した。各グループの「発音の得点」の平均に差があるかを一元配置分散分析で検証した。次に、20名の調査協力者ごとに日本語学習時間を算出し、彼らの「発音の得点」との関係について分析した。

RQ2の解明のため、調査協力者の「発音の正誤」が4つのテ形の習得状況要因と関連しているかを χ^2 検定で分析した。4つの習得状況要因は、動詞のテ形を正しく覚えているか、動詞の辞書的な意味を知っているか、テ形に現れる音便の種類、動詞の活用の種類である。

RQ3の解明のため、特殊拍の種類および有無によって調査語を分類し、各グループにおける調査協力者の「発音の得点」の平均に差があるかを反復測定分散分析で検証した。また、特殊拍を最小対立とするミニマルペアの発音の得点を分析した。最後に、初級の韓国人学習者にとって習得が難しい特殊拍を明らかにするため、調査協力者の発音について音響分析を行い、特殊拍の持続時間を測り、誤用のパターンを分析した。

第4章 調査結果

第4章では、調査Ⅰで調査協力者の発音を判定した複数の母語話者判定者の一致率を提示した上で、3つのRQについて行った分析結果を述べた。まずRQ1の分析結果により、以下のことが明らかになった。

- 1) 初級の韓国人日本語学習者のテ形習得過程において、日本語学習歴と1週間の学習時間はテ形の発音の習得に影響しない。

- 2) 日本語学習時間が近似している2名の韓国人学習者が、発音の得点順位において最上位と最下位に分かれているケースと、日本語学習時間が最も短い学習者の発音の得点順位は20名中2位であるケースが見られた。

次に、RQ2の分析結果により、以下のことが明らかになった。

- 1) 初級の韓国人日本語学習者のテ形習得過程において、正しいテ形を覚えていること、動詞の辞書的意味を知っていること、テ形に現れる音便の種類、動詞の活用の種類はいずれもテ形の発音の習得に影響する。
- 2) 初級の韓国人日本語学習者のテ形習得過程におけるテ形の発音の傾向として、「動詞のテ形を正しく覚えていて、かつ動詞の辞書的意味を知っている場合」、正しく発音できた場合が最も多い。
- 3) 撥音便が現れる動詞と促音便が現れる動詞のテ形は正しく発音できる傾向があり、イ音便が現れる動詞と音便が現れない動詞のテ形は正しく発音できない傾向がある。
- 4) 1グループの動詞のテ形は正しく発音できる傾向があり、2グループと3グループの動詞のテ形は正しく発音できない傾向がある。

最後に、RQ3の分析結果により、以下のことが明らかになった。

- 1) 初級の韓国人学習者は、動詞のテ形で現れる特殊拍の種類および有無によって、発音の得点の平均に有意差があった。その中でも、「イ音便」と「非特殊拍」は「撥音便」と「促音便」に比べて正しく発音できていない。
- 2) 促音や長音を最小対立とする場合、特殊拍がないテ形より特殊拍があるテ形の発音の得点が高い。
- 3) 初級の韓国人学習者にとって「促音挿入」>「促音脱落」>「間違ったテ形」>「長音挿入」の順でテ形の発音の習得が難しい。
- 4) 音響分析の結果、正しい動詞のテ形と辞書的な意味を知っていて、発音で特殊拍の有無に従い音の調節をしても、母語話者には区別がつかない場合がある。

第5章 考察

第5章では、調査によって明らかになった結果を踏まえて考察した。また、先行研究で指摘された「韓国人学習者の促音挿入」「音便によってテ形の習得順序に差がある」ことが本研究でも現れたことについて考察した。まずRQ1の結果より、日本語の発音能力は学習歴の増加に伴って、自動的に育まれるわけではないことが示唆された。また、日本語学習

時間と発音の得点順位の分析から、特殊拍の習得には日本語学習歴や日本語学習時間よりも有効な要因が存在する可能性が示唆された。

RQ2の結果より、特殊拍の習得においてテ形活用の文法を正確に学習することと動詞の辞書的意味を知っていることが重要であることが示唆された。また、テ形に現れる音便の種類と動詞の活用の種類によって習得順序が異なるため、初級の韓国人学習者を対象にするテ形の指導において、学習者に誤用の傾向について情報を提供し、発音に気を付けてもらうことの必要性和、誤用を減らすための指導法の考案が必要であることが示唆された。

RQ3の結果より、初級の韓国人学習者にとって特殊拍の習得の難易度は特殊拍種類および有無によって異なることが明らかになった。さらに、本来、促音がないところに促音を挿入する誤用が多く見られた。そのため、初級の韓国人学習者にテ形の発音を指導する際に、テ形にイ音便が表れる場合とテ形に音便が表れない場合には、特殊拍に気を付けてもらうことの必要性が示唆された。

第6章 結論

第6章では、RQの結果を持って研究目的が達成されたかについて述べた後、日本語教育への示唆と今後の課題を提示した。本研究から得られた日本語教育への示唆について、以下の2点を挙げた。

- 1) 特殊拍に焦点を当てたテ形の指導：初級の韓国人学習者のテ形の発音に共通した誤用の傾向があることを踏まえ、初級の韓国人学習者にテ形を教える日本語教師に、誤用の傾向についての情報を提供できる。教師の指導により韓国人学習者が学習初期段階から自身の発音について意識し、特殊拍の習得が進むことが期待される。
- 2) 言語形式の焦点化の必要性：動詞のテ形を教えるという、文脈を重視した教育活動においても、日本語音韻の特徴に焦点を置き、学習者の注意を喚起する必要があることが示唆された。

最後に、本研究を踏まえた今後の課題を2点挙げた。

- 1) 発音の要素の総合的な検討
- 2) 特殊拍の習得が進んでいた学習者の発音学習ストラテジー

参考文献

関光準 (2007) 「韓国人日本語学習者の発話に見られる促音挿入の生起要因」『音声研究』11(1), pp. 58-70